

平成29年度 第1回佐伯市総合教育会議 議事録

1 日 時 平成29年7月21日（金） 開会13時30分 閉会14時25分

2 場 所 佐伯市役所 本庁舎 庁議室

3 出席者（構成員）

市長 田中 利明

教育長 土崎 谷夫

教育委員

1番委員 河野 利道

2番委員 欠席

3番委員 桑門 超

4番委員 米倉 ゆかり

4 事務局

市長部局

秘書政策課長 金田 隆

秘書政策課政策推進係総括主幹 御手洗 修

教育委員会事務局

教育部長 小野 正司

教育総務課長 吉村 岩雄

学校教育課長 川野 剛

社会教育課長 長田 文春

体育保健課長 阿部 俊二

教育総務課総務企画係総括主幹 須山 禎宏

教育総務課総務企画係主査 清田 甲生

5 会議の概要

【協議事項】

(1) 佐伯市の教育改革について

【議事録（要旨）】

(田中市長)

・今後の会議の進め方は、各教育委員の方々が抱える、いわゆる現場の課題を提示しても

らいながらそれに対して、例えば外部の専門家を招いて話を聴かせてもらう等、多面的な会議の持ち方で行いたい。

・小中学校の義務教育を中心にしながら、生涯教育など色々な分野があるが、例えば小中高の連携、産業教育、私も強調しているが、佐伯で学び、佐伯で就職をし、佐伯で人生を全うしていくという形も佐伯人の育成の中でも大事だと思う。しかもこれからは人口減少、生産年齢人口の減少という深刻な課題もある。同時にもう一方では、南海トラフ大地震という防災の危機というものもあり、地方創生、佐伯創生という言葉の中の根本は、人の問題が非常に大きい事だと思っている。

・企業誘致を盛んにしてほしいという市民の声もあるが、その企業誘致の前に教育レベルがどの程度の街なのかということは、企業の誘致を働きかける上で非常に大事な要素になってくる。これまでは、学力テストや偏差値だけで教育レベルが高いとか低いとか比較論ばかりをしてきたが、実は、佐伯に住む人達の教育的な文化芸術的なクオリティをどう高めていくかということが総合政策だと思っている。

・総合教育会議は、従来の教育委員会が提示している内容を超えて、会議の中でテーマを拾いながら幅広くやっていきたい。会議の公開もされるので、きちんとした成果を出し、公開に値するだけの内容にしていきたい。

・約15年前、県議会議員の時に、佐伯中央病院の小寺先生が県の教育委員に就任したことを契機に、「佐伯の教育を考える会」を個人で立ち上げた。佐伯市の教育長、教育事務所長、事務局の教育事務所が中学校の校長会の会長や、PTA代表、小中高の現場に対して責任ある方々を呼び集めて年2回の会議をし、講演会等、色々なことを行った。

・教育の分野に長けた方々を集めてテーマを決めていくというやり方もあるが、せっかく会議をするなら、何か成果を出したいというのが願望である。一步で二歩でも佐伯の教育改革が進んでいるという経過を各委員と共に実感できるようなものを作りたい。市長には執行権があるので、ただ会議で発言するだけでなく、政策事業となるものなら、予算を措置して実行するだけのものを総合教育会議は持っているので、次回集まった際には、教育課題をテーマを絞り込んで掲げてもらいたい。

(河野委員)

・佐伯市の教育は、教育委員会がやっている教育だけでは全ては賄っていない。市長部局でもたくさんの方々の様々な市民に対しての教育が行われており、そういったものを含めたときに佐伯市の教育と言える。佐伯市で行われている様々な教育をピックアップしながら、今どうなっているか分析し、その問題点に対しこれから佐伯市をどうしていくかビジョンが必要である。

・佐伯市の将来を見据えたとき、人口がどんどん減って市として成り立つのかというくらいに心配である。そうした状況で、学校だけを考えれば良いということは論外だと思うので、枠にとらわれず長期的な展望にたって取り組んでいくことが非常に大事だと思う。

(田中市長)

・総合教育会議は、教育委員会が現在運営しているが、総合政策部にしたらどうかと思っている。

(河野委員)

・私もそう思う。教育に対して市長部局は、教育は学校教育がしている、自分たちはしていないという意識があるのではないかという心配がある。

(田中市長)

・教育委員会もタイアップしないといけないという事実もあるので、もとの形に戻し、そこで色々企画を練りながら進めて行きたい。

(米倉委員)

・学校現場にすることが多いので、企業や職業訓練校などの公立の学校以外の機関に話を聞く機会がなかったと思う。現場の声を聞くという意味で教育委員がもっと広く声を聞ける場があれば良い。自分の職種は臨床心理士で、今年度、日田の災害支援のサポートをしており、昨年度も熊本地震があって各県の状況を聞き、支援をどうするかというサポートをしてきた。学校が避難所になることが多く、管理職と市役所の職員が多分中心になってくる。一番手が足りなかったのは、乳幼児を抱える家族と高齢者だった。学校は、まだ支援の手が行き届くのでいいが、支援が行き届きにくいところもあり、どういう形で支援するかと保健師と公民館訪問したり、様々な策を考えた実情から、佐伯も南海トラフ地震が想定されるので災害支援や災害に向けた準備ということに関しても佐伯の中で何ができるか考えて行きたいと思っている。

(田中市長)

・防災教育については、水防訓練が5月か6月くらいにあるが、消防団、警察、緊急レスキュー隊など色々な方が参加した訓練があり、いつも同じ方が集まり毎年行っている。そこに小中学生が参加すれば非常にリアル感、臨場感があり、人を助けることがどんなに大変かという姿を見ることによって、防災は大変なんだと、まず子供の認識を感性で感じてもらうことも大事である。知識は色々なことで学べるかもしれないが、その現場に立って感じる力は非常に大事だと思う。来年は、できれば学校参加で水防訓練を見学してもらいたい。子供たちが家庭で両親に、「こんな風に水防訓練していた」という話が出たとき、家庭に防災というものがテーマとして入ってくる。その子供たちの役割は大きいと思う。

・学校だけで学ぶのは、知識かもしれないが、生きた勉強をするということが大切であり、佐伯に対する愛郷心になる。教育勅語などでは人の愛国心、愛郷心がなかなか育たない。

城山を見て故郷の山はこれだという、そういう感情が子供のころにできたとき、佐伯に帰り城山を見て涙が出るような本当の意味での言葉では語らないが、感じる力というのがこれからは大事で、これは芸術の世界に通じると思う。

(桑門委員)

・幼稚園時代に城山に行ったということが葉っぱを拾いに行ったり、生き物を探しに行ったり、そういう経験をしているということが大きくなったときに懐かしさや思い出を育んでくれると思う。都会にはない自然豊かさというものを幼児期にたくさん経験してもらえたら良いと思う。心の豊かさというものを育む上で色々な優れた芸術に触れる機会があることはとても大切なことであり、そういう機会を作ろうと自分なりに考えている。その時に、佐伯出身で活躍している方がいれば、帰ってきて頂くことで、その方にも佐伯を身近に感じてもらえ、佐伯は舞台になるということも考えている。

・人口減少という大きなテーマの中でも一度佐伯を出ても佐伯に帰って活躍する場があるという流れも何かできてくると良いと思う。

(土崎教育長)

・私の経営感覚や意識の中で常にプランの具現化や、報告される現場の事情がまず対応する優先順位のトップにあるため、どうしても大局的に広く捉えるということよりも非常に直接的にポイントで捉えるということになってしまう。大局観を持つという意味では、私が一番センスとして必要であるし、警戒しないといけないことだと思う。

・教育は、学校教育だけの限定ではなく、先生、子供たちだけのものではないし、佐伯の資源を大事にしないといけないと思う。学びの教室というカルチャー佐伯が行っている事業では、主に退職した校長 67 名が 14 の小学校に行き、毎週水曜日に小学校 4 年生に算数や国語を中心にボランティアで教えていた。社会教育の現場等では、少なくとも約 3 千人、延べ年間 2 万 3 千人の色々な立場の方が関わってくれている。市民力というところで佐伯の教育が、支えられているということが分かる。こういうものをいかに生きがい創出に繋げるか、生きる手応え、関わるのが喜びとなるような市民性や市民を多く抱えることが地域の活性化、生徒たちの健やかな成長に大切だと思っている。それを大事にする佐伯市でありたい、そういう人が生き活きと活躍することを評価、期待し、感謝する地域でありたいと思う。

(田中市長)

・青年塾で立志塾というものがあり、市の職員も多数参加し、大学の教授が来て、全国に同じ立志塾を作りながら佐伯独自の、いわゆる覚悟をどう持って経済活動に勤しみ、それぞれの持ち場の仕事にどう取り組むかという事をテーマにしており、成果のある非常に良い塾だと思っている。佐伯創造塾というものもあり、総合的な佐伯人を育成するための塾

で、教養的なものである。

・立志塾の若い人がこれから佐伯を作って行こうと思っているなど感心している。例えば、船頭町の京町通りに自分で空家を購入し、改造して1階を店舗にして収入を得ながら自分たちは2階で暮らすというような設計を持ち、京町通りを活性化しようと考えている。船頭町は、かつてのイメージでは土曜夜市で明々と電灯が灯った中で作り物、飾り物があり、両親に手を取られて行った記憶が残っているが、もう一度あのような佐伯の持つ良さを作ろうという意欲がある。

・大手前は、複合施設で立派な物ができるが、ただ施設ができたから街が賑わい、人が変わっていくということではない。街づくりというのは、人がそこにどういう課題、テーマ、発展等を考えて集まってくるかということが重要である。

・城山の城の石垣を見て 194 番目の城郭の登録をした城があったり、武家屋敷通りの町並み、船頭町にも麴屋さん等 400 年を越す老舗の店が並んでいる。そういう意味での風情を作る。日田市はそこを上手く作り上げているが、佐伯市も風情を上手く生かし、外から人が来てこの街は良い、この街に住んでみたいということが出てきたら一つの定住政策になる。そこにまた教育、文化、芸術が加わると一層、この街が歴史のある街、教育のある街だと実感してもらえる。それがこれからの佐伯の伸びしろであり、それができると佐伯の創生もほぼ 90 パーセントができる。そういうモデルをここに作りたいという思いがある。

(河野委員)

・佐伯市の教育は、歴史的、自然的なものを活用し教科書だけを教えるのではなく佐伯が教育のステージとなり、その中で子供たちは伸び伸びと育ち、将来素晴らしい人間、佐伯市民に育てていくというような構想があったらいいと思う。

(田中市長)

・これから佐伯市の総合計画で色々な地域、市民の考え方を含めて作っていくが、10 年後の佐伯の姿を描いていく、教育もビジョンがなければならない。しかも、学校教育、社会教育などばらばらではなく、オール佐伯の中でそういうものを体系付け、そして同じベクトルで目的に向かって行くということが大事である。市議会を経て作られた、さいき“まなび”プランを尊重したいが、これが金科玉条ではないと思っている。

(河野委員)

・さいき“まなび”プランだけだと大学を出たら佐伯市に帰ってこない。これをステップにして都会で尽くす佐伯人になってしまっているが、できれば佐伯で頑張ってもらいたい。そのためには佐伯市は素晴らしい、良かったという意識を小さいころから植え付けるというのは、非常に大事なことだと思う。

(土崎教育長)

・こういうテーマは本当に重いと思う。村を捨てる学問という話を聞いたことがあるが、沖縄県のある離島の村長が村には何もなくて、唯一できることは自分たちの子供を賢くすることだとし、学校教育に村の少ない財政から捻り出して真剣にやったが、結果は村長の考えと違うもので、優秀な子供ができたがみんな出て行った。優秀な人材を育て、佐伯の地域の活性化のために生活基盤をここに置くというような子供たちにするためには、その仕掛けがもう一つ必要である。ないと手放すだけである。もちろんその方は日本各地、世界で活躍する人材になるので、決して悪いことではなく、個人的な意味では幸だと思うが、地域の活性化や地域を作るということから、人が残ってここで暮らすという人の集まりがないと地域が死んでしまう。極めて難しいテーマであるが、いつも考えておかなければならないと思う。

・故郷に繋がる縁を持つというか、頭で賢く学んだだけでなく体験的に味わったようなものを獲得しておかないと故郷回帰のような言葉は無になる。佐伯は良い所だった、原風景は佐伯にあるというものを持たないと帰ってこない、佐伯を選ぶということにならないと思う。

・教科書で勉強するだけでなく、地域を教材にして取り入れた体験的な活動を通して、自分の地域は良いなと思わせるようなものを作っていかなければいけない。体育スポーツでも文化でも地域の祭りや伝承といったことでも良いと思う。そういうものを大事にしないと、愛郷心、この地を愛する心というものは現実には生まれないと思う。そういうものを大いに作る、学校だけに期待するのではなく、むしろ社会の中でそういう機会があるように仕組んでいくことが必要である。

(田中市長)

・豊後高田市が、学力不足の子供たちが取り残されていて何とかしたいということで教育長が学校の先生に呼び掛けたが上手くいかなかった。しかし、民間の方に呼び掛けて講師を募集したところ、色々な分野の子供たちに関心ある人たちが立ち上がり、学びの教室を作り始めた。そういうことがだんだん力を発揮して、先生もやるようになって上手くその形を作っている。

・今の先生は、非常に忙しい。行事や部活動にも参加しなければならず、時間がなく過労気味だと言うが、教師一人が抱えたら大変な状況になると思うが、もう少し市民が教育活動に参加できるように上手くコーディネートできないか、それが佐伯市の総合教育のあり方だと思う。塾の先生ももちろんいるが、民間の方で大変優秀な方もたくさんいる。上手い具合に人材バンクを作るなどすると市民総参加の教育活動ができてくるという感じになると思う。

・佐伯市総合教育会議は、年1回ではなく、テーマをセッティングして各委員に事前に資料の配布をしながら、内容によっては外部から講師を招き、話を聞きながらテーマの深掘

りをするこもやっていきたいと思う。そのため総合政策部に拠点を置き、私と教育委員会と総合政策部で協議をしながらテーマの精選等をやっていきたい。テーマについては、取り上げてほしものがあれば秘書政策課まで言ってほしい。

(金田秘書政策課長)

・平成 27 年度の第 1 回の総合教育会議を開催するにあたり、事前に庁内で話し合いを持ち、総合教育会議の事務局は教育委員会とした。法令の中で本来は市長が召集し、市長主導で行う会議なので総合政策部の中に事務局を置くという決まりになっていたが、発足当時は、急に教育委員会から市長部局の方が受けるというのが抵抗があって難しいのではないかとということで補助執行を教育委員会にさせるということで教育委員会に事務局があつた。今回、市長の強い意向もあり、協議の結果、本来の総合政策部に事務局を置くということになったので、次の会議からは、総合政策部が事務局として教育委員と共に情報交換しながらテーマを設定し、そのテーマについて深掘りしていきたい。

(田中市長)

・教育委員会にも協力してもらわないとできる話ではないので、色々な知恵を貸してほしい。熱意と情熱と人の力が物凄く大事なので、それを持って頑張って行きたいと思うので、今後ともよろしくお願ひしたい。

(金田秘書政策課長)

・教育制度改革で教育に関する大綱を首長が策定するという事になっている。総合教育会議が発足した当時、教育大綱の制定について、どうするかという話し合いが持たれ、さいき“まなび”プラン 2012 があるので、これをもって大綱に代えるということで当初スタートしている。今回、第 2 期の佐伯市長期総合教育計画が 2017 年度から 2026 年度の 10 年間策定されているので、当面は、教育に関する大綱を、さいき“まなび”プラン 2017 とするということでご確認を頂きたいが、よろしいですか。

(構成員)

・全員「はい」との返事あり

(田中市長)

・以上で第 1 回佐伯市総合教育会議を終了する。

6 傍聴人 0 名